

昭和 42 年 3 月

相の谷古墳発掘調査報告書



愛媛県教育委員会

昭和 42 年 3 月

相の谷古墳発掘調査報告書

愛媛県教育委員会

序

古墳は古代において、高塚の行なわれた時代の墓を意味するものであり、わが国では、およそ三〜七世紀の間に築造され、この特殊な墓の名をとって、当時を古墳時代と呼んでおります。

歴史上の事実と伝説がいり乱れ、日本書紀・古事記しかない古墳時代では、住居跡や古墳などによって、その時代の基本的な姿が組み立てられることになるため、遺跡はその根本的な資料というべきであります。

それ故、遺跡というものは、人類がその発展のうえに何らかの形で地上にとどめた活動の跡であって、宝物のように移動のできない、また、してはならない地上に固定したものであります。

しかるに、近年、産業の開発にともない、宅地造成・道路建設・工場誘致などによる土木工事により、埋蔵文化財包蔵地は破壊の危

機にさらされているのが現状であります。

今般、学術調査を実施した今治市相の谷古墳は、宅地造成のため止むを得ず、前年度において、後円部を調査し、本年度において残る前方墳を緊急学術調査を実施し、これが報告をまとめ刊行の運びになったものが本書であります。

学術調査を実施するにあたり、ご苦勞をされた西田県文化財専門委員をはじめ、各調査員および調査員助手の皆さん、積極的にご協力くださった今治市教育委員会の方々衷心よりお礼を申し上げる次第であります。

昭和四二年三月三一日

愛媛県教育委員会教育長

中 矢 常 繁

相の谷古墳第二次調査の概要

一、まえがき

県下第一の大きさをもつ前方後円墳といわれた今治市近見の伊賀相の谷古墳の調査を、昨年三月と今回との二回にわたって行った。未だ作業を完了するに至っていないが、年度末に当り、作業報告をかねて、なんらかの速報をかくこととなった。いうまでもなく精密な測量や遺物の慎重な吟味や比較検討、その他すべてにわたる詳細な記述は短日月ではとても仕了せるものではない。いながら第一、二次の調査をまとめた概報さえもかなりの時日を要するであろう。しかし、ここでは要請されるままにとりあえず中間報告的略報にも当らぬかもしれぬが、次の諸項にわけて概述することにした。

二、調査日誌抄

昭和四十二年三月四日(土)曇後雨

調査団の事務部門と調査部門との打合せを今治市教委で行い、午后には雨中に地主を歴訪、宿舍下準備にも当る。

三月五日(日)雨後曇

午前よく降る。午后宿舍設置、ならびに清掃を行う、男子は今治市湊公民館、女子学生は同所矢野藁樹氏別棟階上、連絡本拠では昨年通り城慶寺内に依頼す。山の現状状況調査も行う。(正岡、村上)

三月六日(月)晴

午前、前方部で墳墓慰の神事を姫坂神社沼崎嘉吉社掌の手により行う。関係者一同参列、団長ならびにその他より諸注意あり。ただちに後円部から前方部に及ぶ草木刈取りおよび葺石露出作業を午后にわたり継続する。

三月七日(火)晴

前年度未完了の上段葺石層の後円部と前方部との接点(くびれ部第三区)でのあり方を明かに検出することにつとめる。この上段葺石列の外側直下の平坦部に経約四〇厘の朝顔型ハニワ円筒の転落?したもの破損品を発見。真鉛修身氏来援

三月八日(水)晴

前日の西側くびれ部上下段の葺石並に寝石の露出作業一応了る。前日出土の上段葺石付の円筒ハニワ取納。前方部の頂上の調査では僅かにハニワ片一土錘一をえたとどまる。

三月九日(木)晴

後円部前方(北側)上記第三区下段の寝石の露出作業中に、かつて転落したらしい円筒ハニワ破損品一例発見(経約二十厘以内?)第五区下段寝石露出作業。

三月十日(金)雨後やや小降りとなる。

朝よりかなりの降雨で作業不能、屋内研修、後休養する。

三月十一日(土)晴

第五区のね石露出作業ほぼ終り、6区に及ぼす。6区の草木刈取りなど、今治西高校生の来援で大いにはかどる。近見中学生も二名加勢。午后には第五区上段の葺石などの露出作業。第五区下段のね石付近女子学生により清掃。

三月十二日(日)曇後晴

第五区葺石上段の清掃、今治西高校生と丹原高校生等日曜につき多数来援で大いに進む。第五区ね石外側の敷石露出作業中、スリ鉢状土器と円筒ハニワの破砕例のか

なりの部分を収集。第四区ね石外側にも同様の発見ありこれらを取納する。

三月十三日(月)晴

平板測量を一部地域に行う。とくに昨年度に残した第三区4区、第四区5区、第五区6区の隔壁について行い、その完了後これら隔壁の徐去作業に移る。この第三区4区の隔壁下には土師器片や、ハニワ破片が数多発見された。松山北高校生遠路来援。

三月十四日(火)晴

第五区6区の隔壁除去で朝顔形円筒ハニワ破砕集合片の一部取納、第三区4区の隔壁にても、いわゆる山坏とよばれる類の土師器の完形品一を上段敷石列の中にて発見、下段のね石付近にて楕形ハニワ片とみえる模様をもつもの一二片、その他竹管文、鋸歯状文、櫛歯状格子目文入りなど多くのハニワ片を拾い上げた。

三月十五日(水)雨

出土遺物の再検討などを行う。芝田幸光君来館

三月十六日(木)雨後曇

ひる現地地下検分、午后小雨をつけて前方部東方尾根を究明し、横穴式古墳の石室天井既に失せて壊度せるものを認め調べる。

三月十七日(金)終日降雨

休養、古墳についての研究討議、幻燈なども見てお互に話合う。

三月十八日(土)曇後晴

前方部東側北端や後円部と前方部との接点に当る東側くびれ部上段、後円部の前方部に直接する中心部などの葺石層のあり方などの究明に当る。なお前々日究明の東方屋根つづきの横穴式石室の清掃も行う。

三月十九日(日)晴

前方部の事後測量と後円部南屋端のね石、葺石席の究明に新居浜工専の新来学生諸君の援軍の力を注入する。

前日來の横穴式石室の清掃により遺物としては管玉、小玉、鉄劍、刀子、鉄斧、鉄鏃、鉄鋤、須恵の広口壺、埴、蓋坏、提瓶、！などであった。午後湊公民館を部落諸行事などのため一応引揚げる。

三月廿日以後は復元後の実例並に無数の葺石ね石数百その他の計測を今治西高校生や新居浜工專の亀十君等の助力で行いつつある。

三、後円部の補充調査

先の第一回の調査以後、さらに積査によって後円部石室床面下の粘土層中その他より若干の遺物を収めえた。そのうち最も著しいものは完全な平線の径一一七種もつた甕鏡である。これは鏡背(文様ある方)を上にして、攪乱層に混入していたものであり、多くの朱をその文様の間にとどめている。(別図拓影並に写真参照)なおこの外にも前回とりあげた鉄劍、刀子などの残欠部と思われる片々や用途不詳の石づきの先のような銅製品の円錐筒をも収納した。

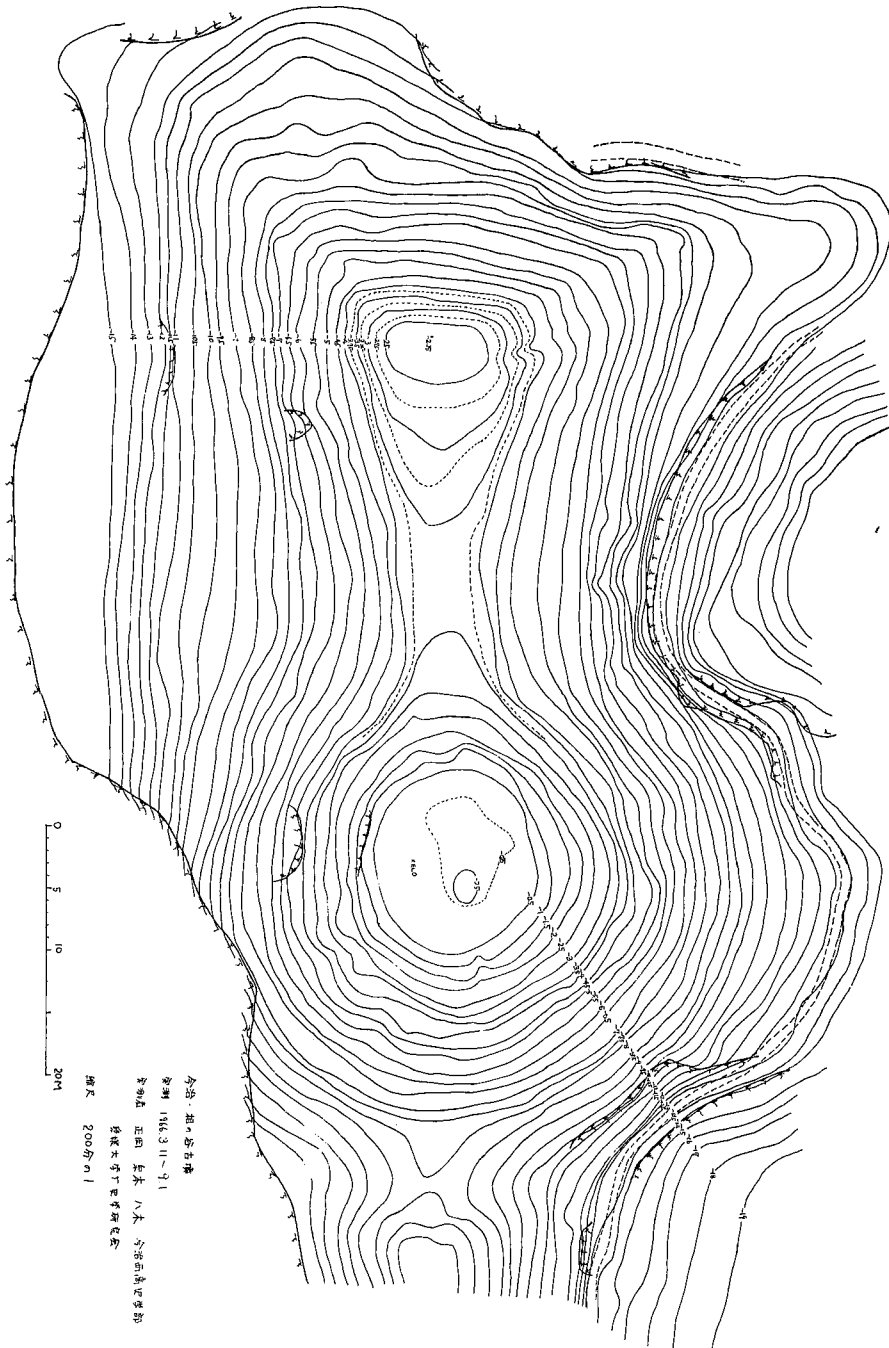
四、前方部の後原形状

今回主として意を用いたこの復元では、後円部をめぐる葺石層はズレおちなどのため、全面にわたって復元しえなかった。しかし、少くも北西側の前方部に連続するくびれ部においては別紙写真参照のように明瞭に存続していることが確認出来た。また二段にわたる葺石層の下段については前方部の西側には殆ど全面的にね石を明かに遺存しており、前方部縁端の前方正面に当る北側にも、右側に当る北東部にも葺石列の根石並にその外側の敷石を認めることが出来た。かくして当前方後円墳の周囲には前回報告に記載した通り二段築成の葺石列の存在をほぼ誤なく証明しうるように思う。

このような復元例を当地方で見えたことは稀有のこと

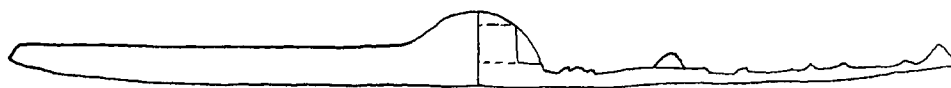
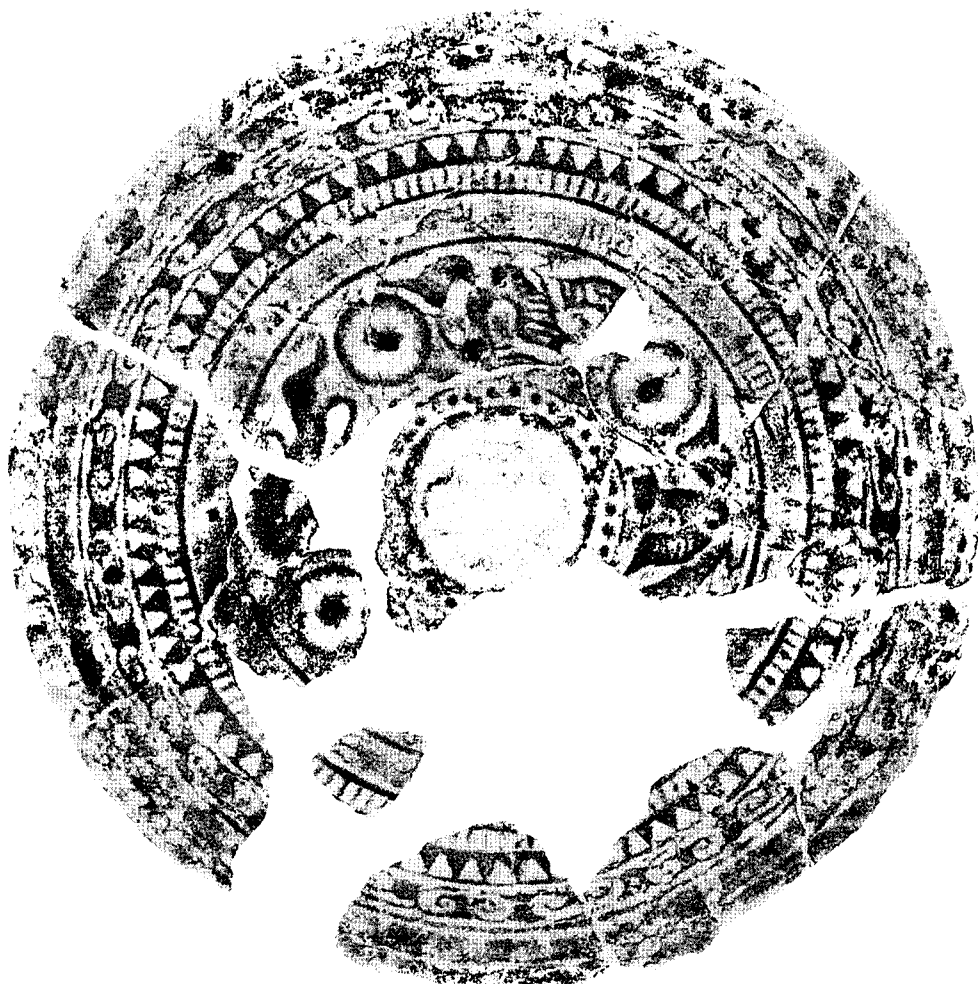
のように思い、当初県下唯一とか第一といわれたことへのいくらかの傍証ともなりうるかと考えられる。幸にこの部分のみでも既壊度の名残として存続されれば何より有難く貴重な文化財の遺産として誇りうるであらう。

今治市相の谷第一号古墳(前方後円墳実測図)

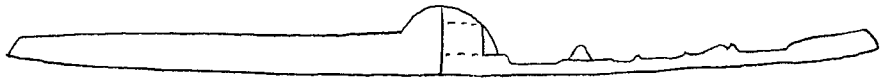
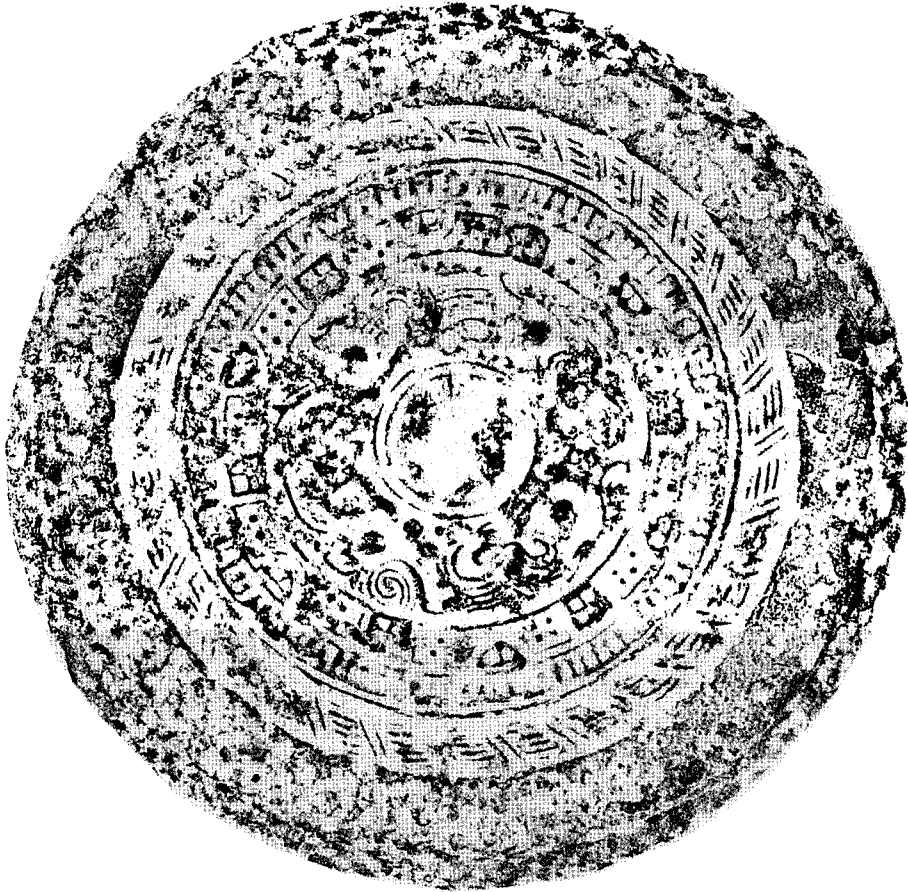


今治市相の谷古墳
 発掘 1966.3.11-9
 発掘者 正田 昌夫、八木 介、高田 昌男
 発掘調査機関 愛媛大学考古学研究所
 縮尺 200分の1

青 銅 鏡 三 角 緣 神 獸 鏡



青 銅 鏡 平 縁 だ 竜 鏡



五、おわりに

未だ現地調査も図面作製はもとより測量や微細部の計測未完であり、個々の遺物、ことに無数のハニワ片の修復や復元はなかなか緒につくことすら期しがたいほどである。

これらハニワの全貌が明らかになり、その他青銅鏡や鉄器具類の検討が完了しても、なお周辺古墳との立地や相関々係を明らかにすべき重要関連事項も残っている。

ことに近接して北側に存する第二号墳は前方後円墳であり(写真参照)その形状その他からはや時代は下るが、なお明確にするべきものがある。またそのほか本墳をめぐる横穴式円墳のうちには(別掲図参照)より古い形式の土塚墓的なものの上に重層的に築成された疑のあるものなどもある。

またこの外にもこの土塚墓をめぐる周溝のようなものの中に採土中発見された箱式石棺の粘土被露をもつたもの、棺内からは青銅鏡の四半分にしたもの二面にそれぞれ穿孔一をもつたものや勾玉、管玉、小玉などを伴出しており、先にあげた土塚墓状のものからも、鉄斧、短剣、やりがんなの併出があった。

以上の土塚墓状もの、箱式石棺、横穴式石室墓などの関連づけも大きな問題を供するものであるかとも思われる。

これらの考案はいずれあらためてさるべき重要なものを含んでいると思われるので、ここには速急な略報で寛容を願うこととし、関係各位の両度の発掘調査に寄せられた御援助に厚く御礼申上げたい。

なおこの間東京大学の教授だった駒井私愛先生や京大の教授であり恩師でもある桜原末治先生をはじめ、東博の三木技官、その他京大、岡大、広大、九大の各考古学教室の方々に種々御指導をいただいたことにも深謝の意

を表したい。

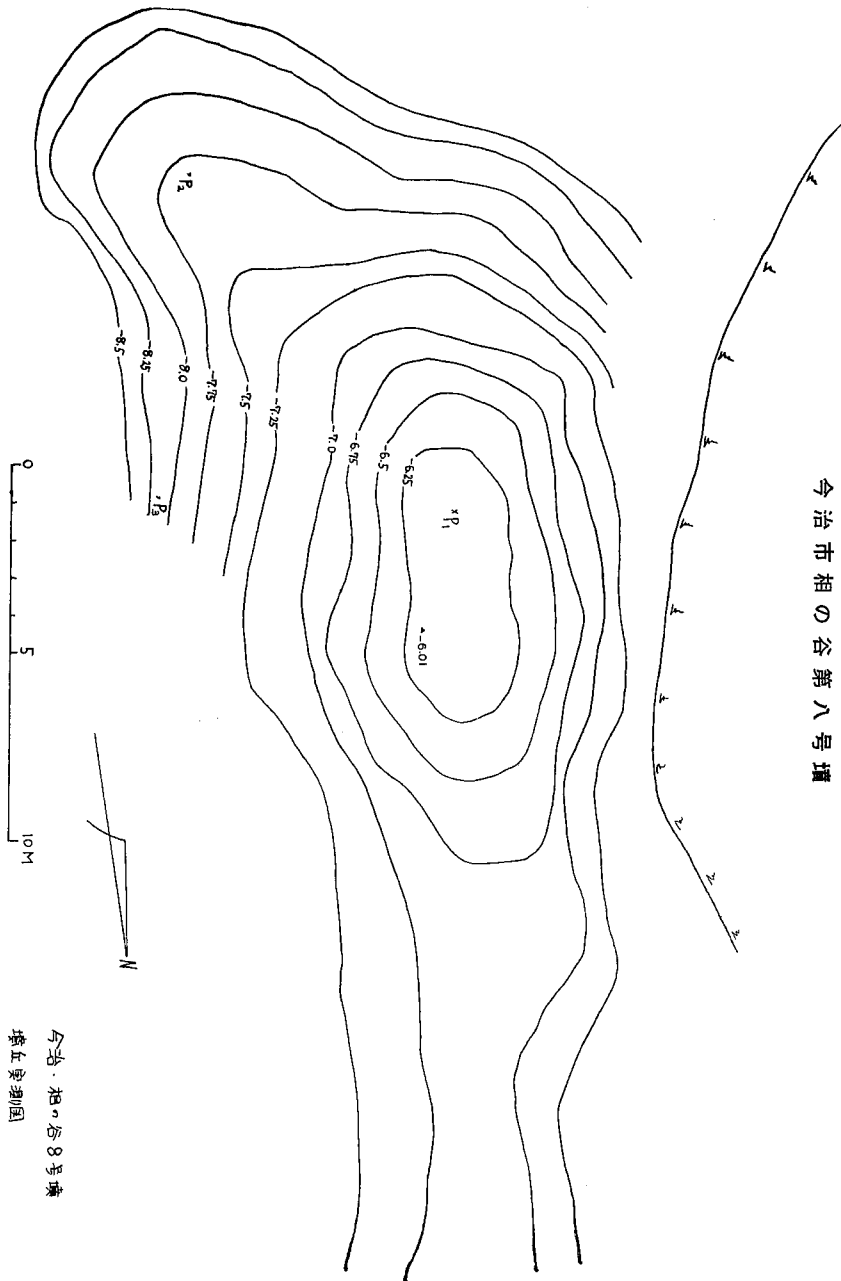
六、付記

発掘調査参加協力者

愛媛大学生

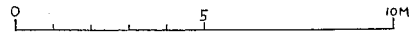
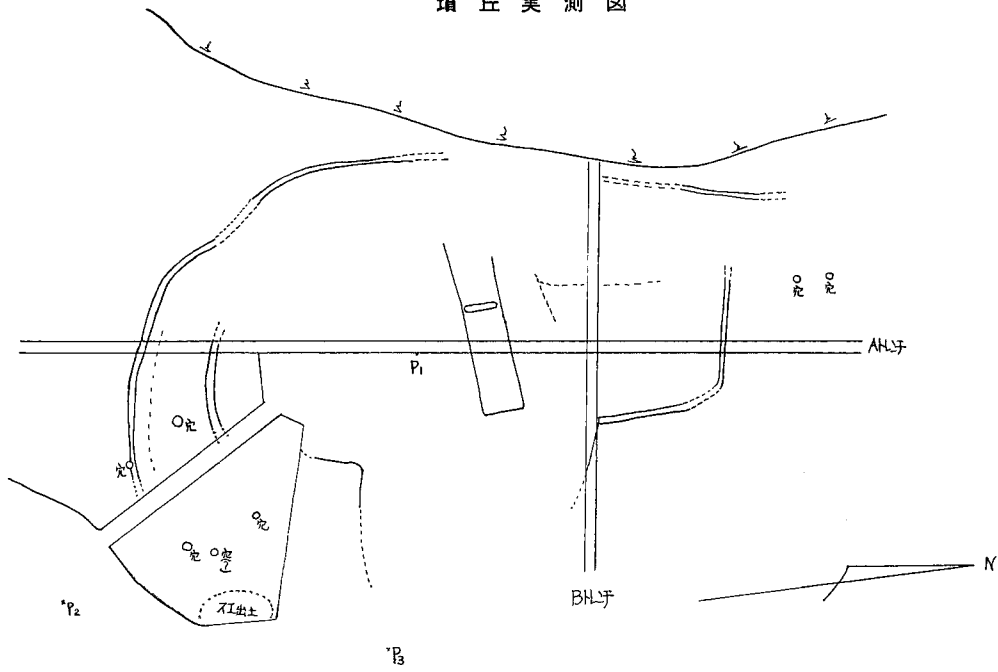
| | | |
|--------|--------|--------|
| 正岡 睦夫 | 矢野 淑子 | 柚山 史 |
| 藤野 正昭 | 山崎 フミ子 | 秋山 年章 |
| 稲垣 正熙 | 菅 恵美子 | 富田 ヤス子 |
| 八木 武弘 | 芝 昭彦 | 伊藤 美智恵 |
| 伊藤 進一郎 | 磯川 暁 | 虫明 秀樹 |
| 井原 忠昭 | 月原 信夫 | 森岡 淑江 |
| 藤沢 照城 | 玉井 一仁 | 友近 和子 |
| 池川 恵子 | 浜森 太郎 | 村上 憲一 |
| 国代 秀 | 木原 隆子 | 長野 由美 |
| 国学院大学生 | | |
| 平松 康毅 | | |
| 立命館大学生 | | |
| 泉 本知彦 | | |
| 大谷大学生 | | |
| 大山 正風 | 武内 範男 | |

今治市相の谷第八号墳



今治・相の谷8号墳
 墳丘断面図
 発掘 1966年7月30日
 尺度 100分の1

墳丘実測図

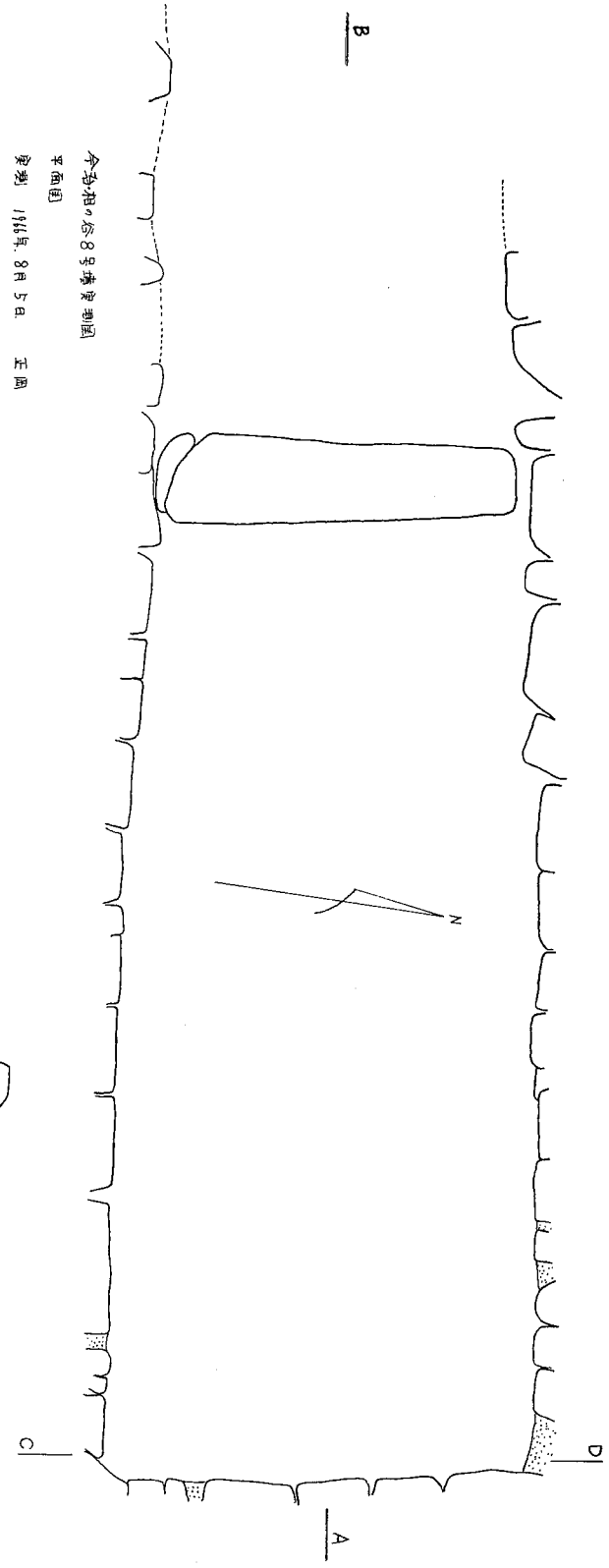


今治・相谷8号墳

平面実測図

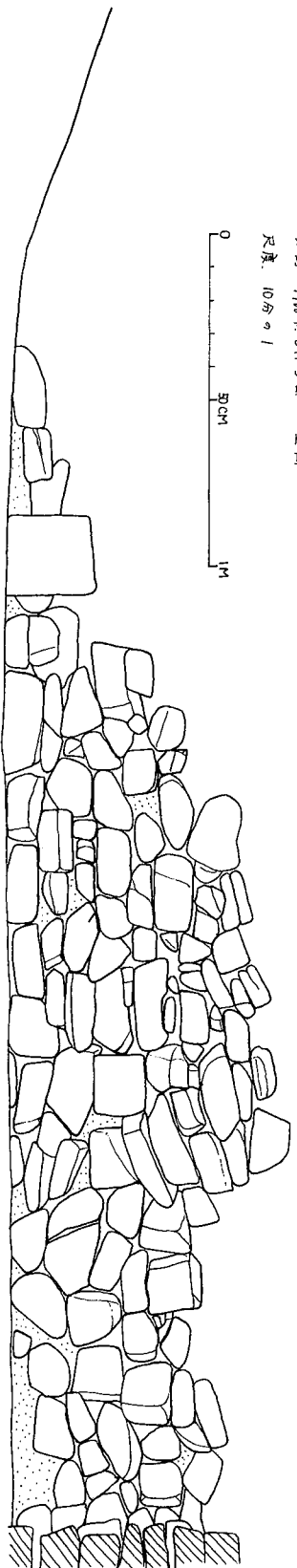
実測 1966年8月5日 正岡、泉本 両部

尺度 100分の1



今为相谷8号塔室平面图
 平面图
 绘制 1964年 8月 5日 王佩
 尺度 10分 1

0 50cm 1m



0 0.5 1m

今为相谷8号塔室平面图
 北朝 佛堂
 绘制 1964年 8月 5日 王佩
 尺度 10分 1

1 6 1

E1-7M

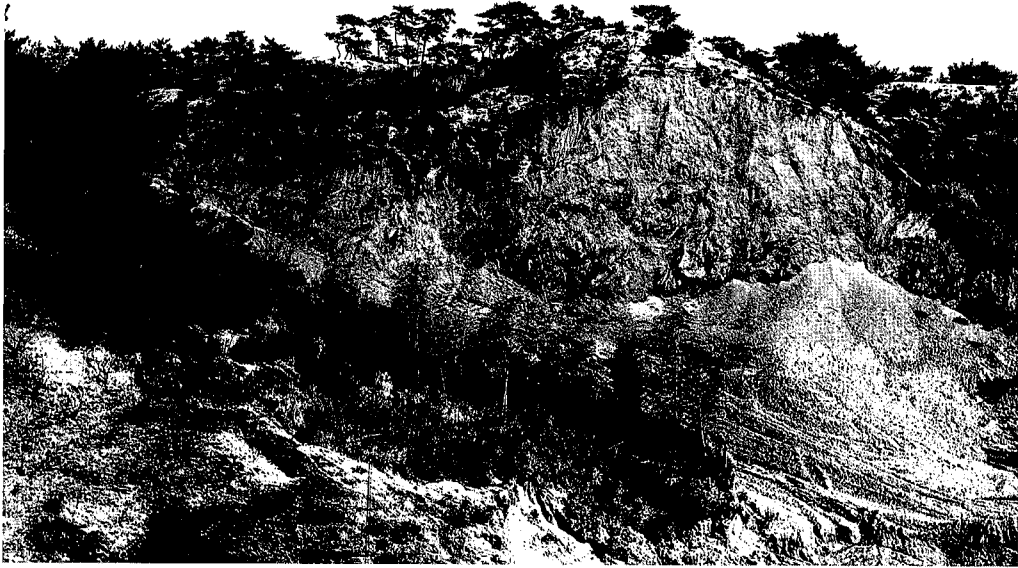
実測図
今治市大字寒、相の谷第七号墳丘実測図



今治市寒
相の谷7号墳

実測 1967年 3月 22日
正岡 十亀 藤井
尺度 100分の1

相の谷前方後円墳 上図1号 下図2号



第一号 前方後円墳の後円部堅穴式石室



第1号墳後円部石室出土青銅鏡（上）三角線神獸鏡（下）だ竜鏡

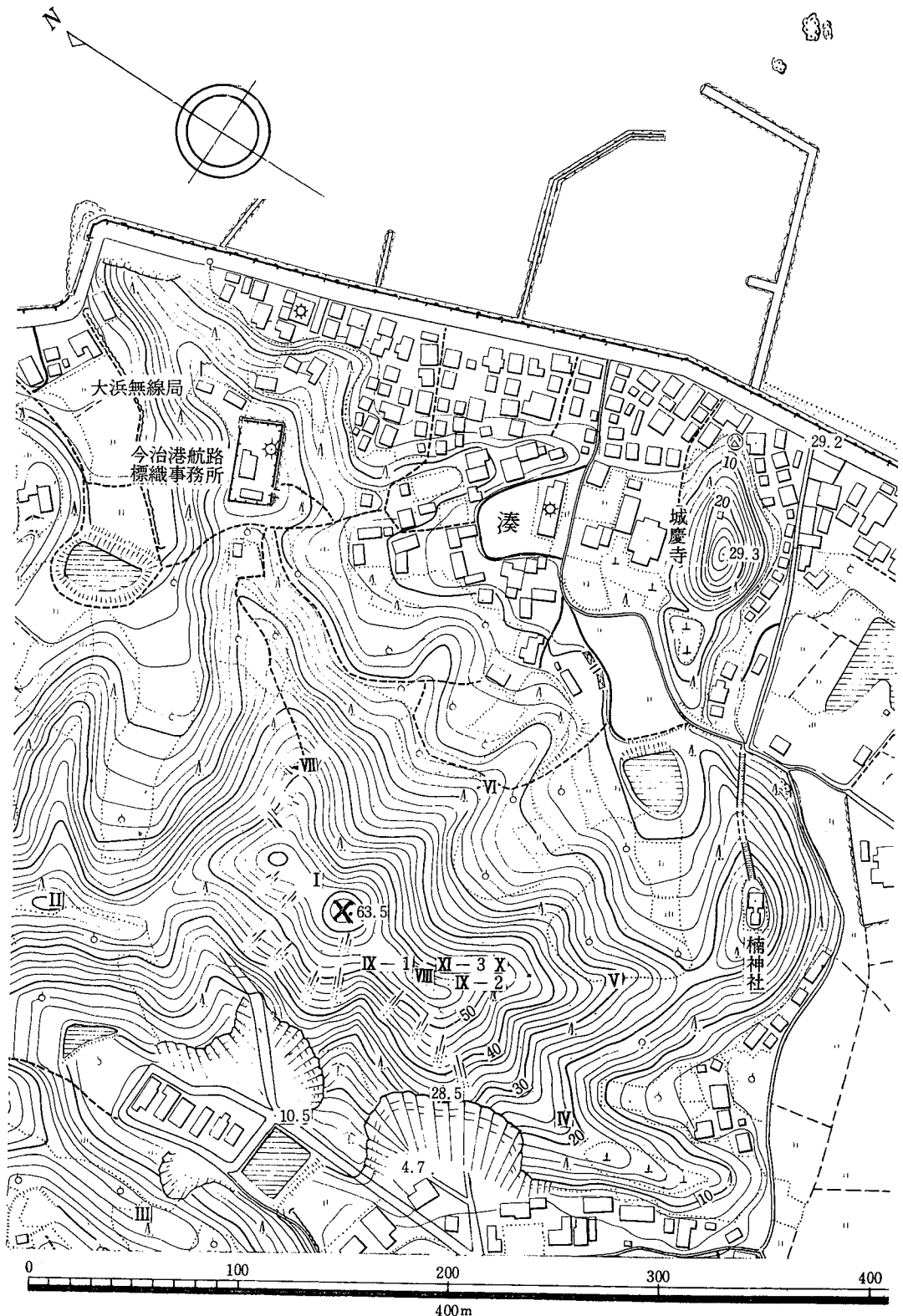


相の谷前方後円墳第1号の現状～西北方より望む、
(第二次調査後～昭和42.3月末)



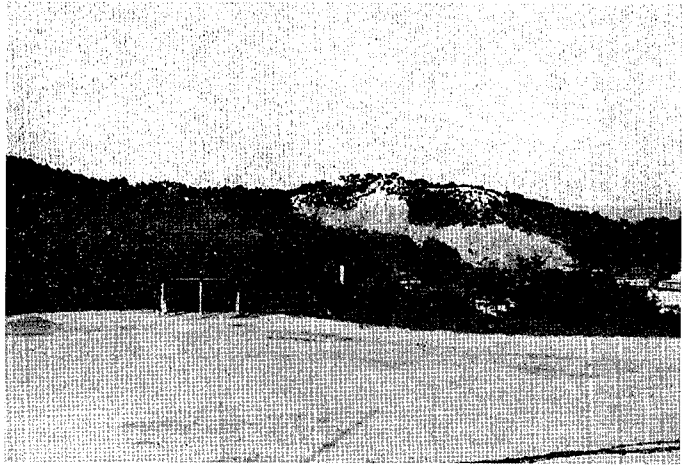
上図の二段築成の実測数値(全長80m78)

後円部基壇南端よりの高さ (後円部頂までの高さ) 10m72
左前方(西側)基壇クビレ部より() 10m513
前方部縁端(北側)基壇より() 9m76
後円部上段よりの高さ() (西側にて6m876, 東側6m918, 南側6m10)
前方部上段よりの高さ() 6m87
後円部より前方部に移る鞍部よりの高さ() 3m10
前方部頂よりの高さ () 2m29



現地図 (原図今治市図No.2, $\frac{1}{3000}$ の一部)

×印 相之谷古墳第1号の後円部
 相の谷古墳群 I~Xまで12基の関係位置



相の谷古墳 調査開始前の遠望

(西方より)

- 。 中央最も高いのが後円部、その向って左が前方部、その更に左に
- 。 第二号前方後円墳がみえる。
- 。 右の峯には箱式石棺一、横穴式石室二土壙墓らしきものが採土で露出した。



第二次調査後、西北方より見る



前方部西北陵線方向より



後円部の左前面（西北部）二段築成の上段付近
（下の人の足もと）

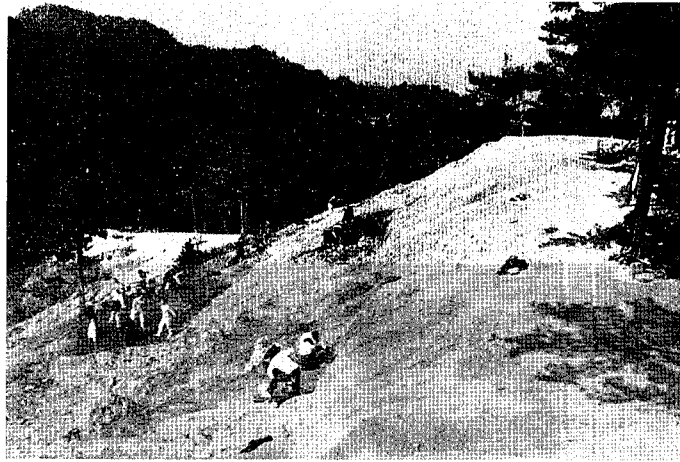


円い穴はハニワの転落していた跡
その前方部との接点（クビレ部）←



クビレ部の根石とその間に流れこんで
みえるハニワ片

二段築成の上段前方西部斜面



上段の清掃露出作業↓



二段築成の下段の清掃状況↓



下段根石付近の蓋石上のハニワ破片

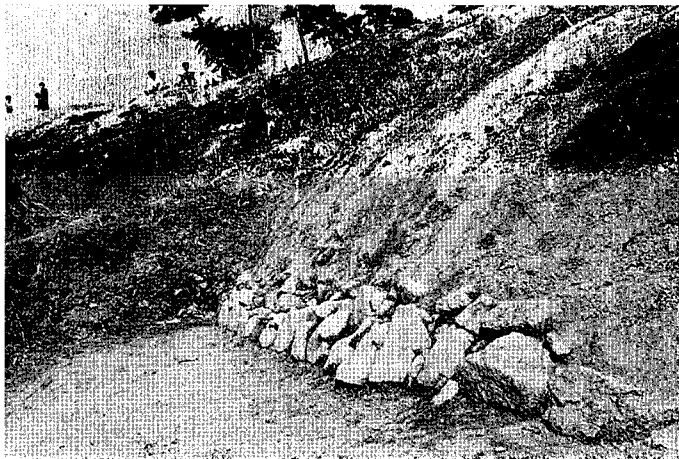




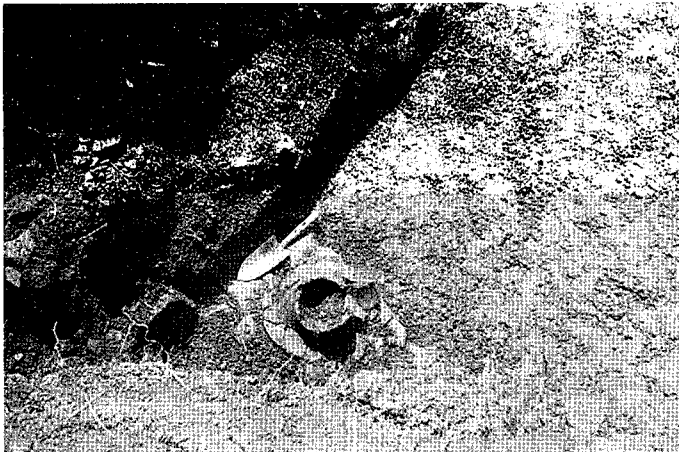
後円部の二段築成を前方部西斜面より見る



↑西斜面の後円～前方の基壇
の根石を露出させたところ→



西側クビレ部を後円頂付近
から見下ろす



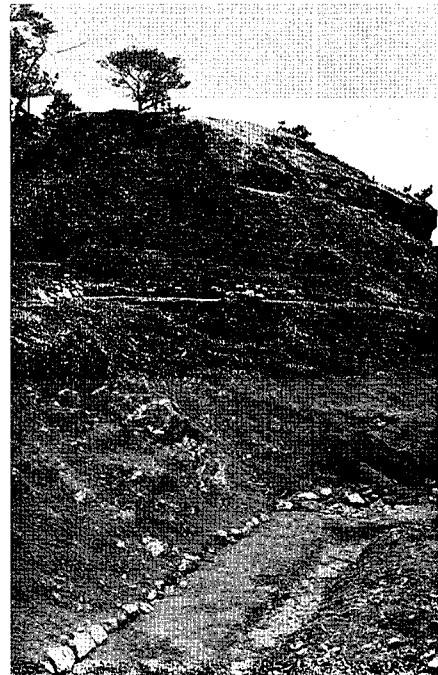
同上クビレ部基壇付近に転落の
朝顔型ハニワ破損品



ハニワ破片 (左端は
楕形の部分?)

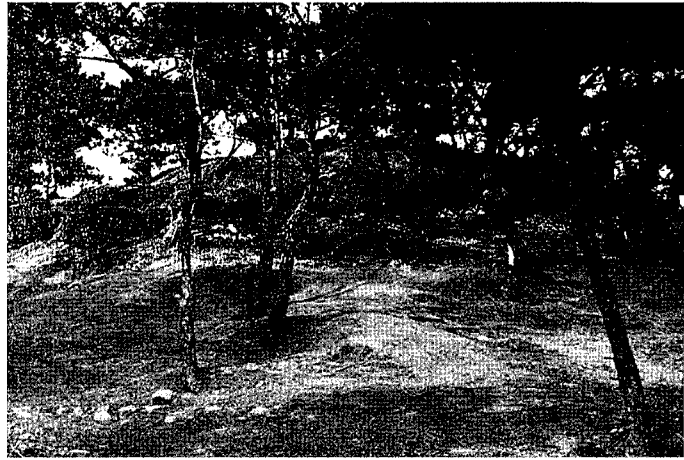


後円部の二段築成の上段に立つ
今治西高校生



↑ 二段築成を、西側クビレ部
↓ 下方より見上げる
→

後円部東南側斜面に露出している
基壇の葦石列

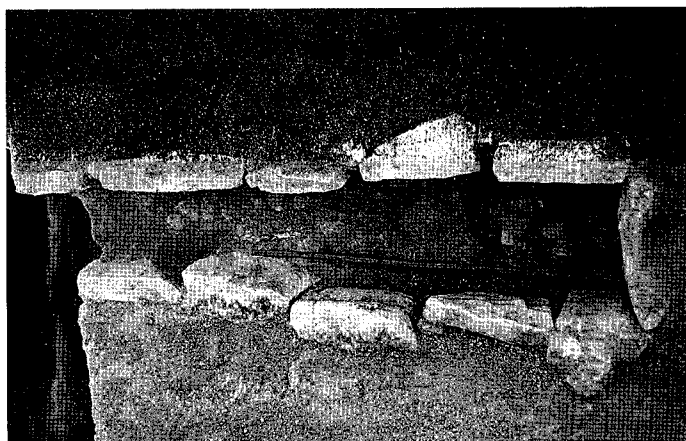




Ⅶ号横穴式石室切断面↓
Ⅸの1号 箱式石棺↓

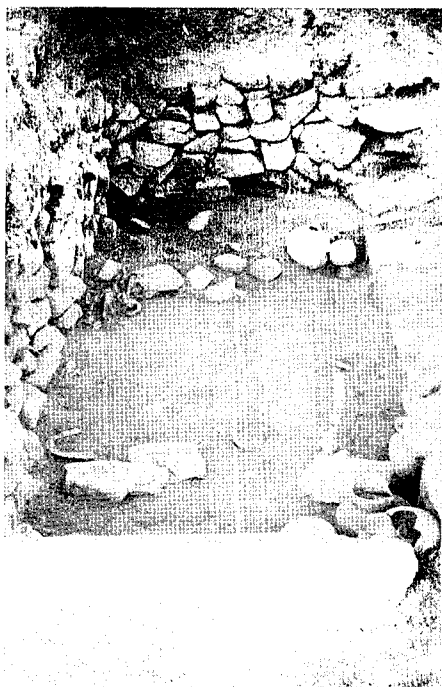


後円部の南峯つづきに
露見の横穴式石室（Ⅶ号墳）

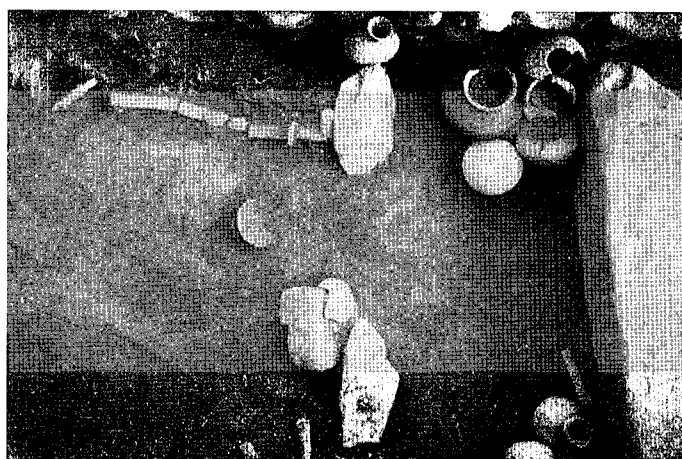


同上箱式石棺

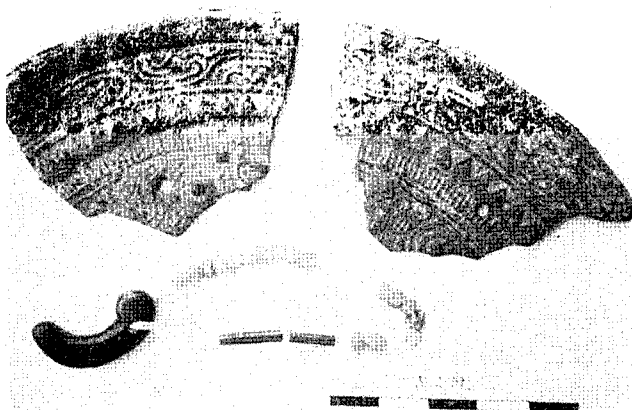
Ⅷ号 石室清掃の結果



円頭大刀など出土

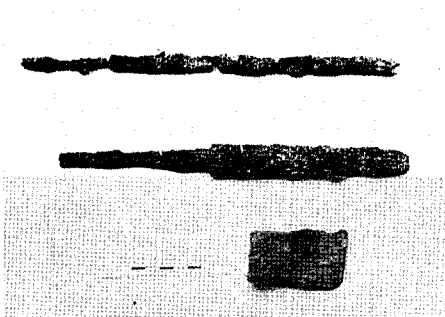
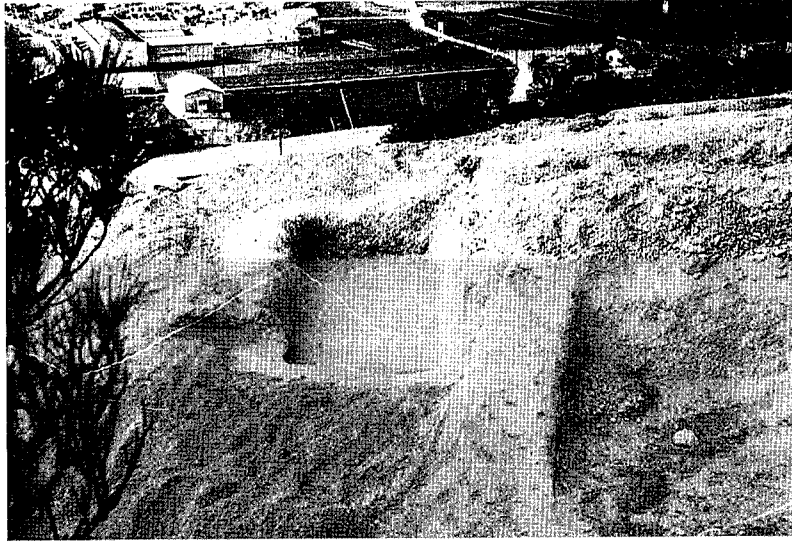


Ⅸの1号棺内から出た貴重遺物

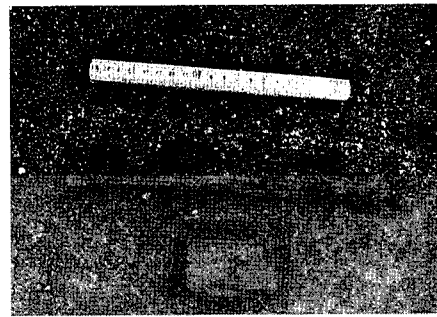


鏡片二（外区平縁に流雲文？をもち
内区に穿孔各一をもつもの）
勾玉一、管玉二、小玉一七

崩れつつある葺続きで見出された
土壙墓？(Ⅸの2・3号)



上から 1. やりがんな 2. 鉄剣 3. 鉄斧

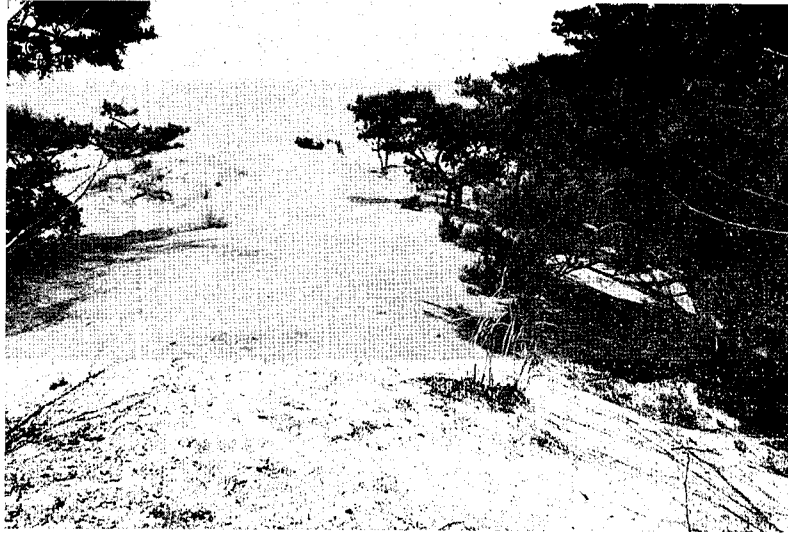


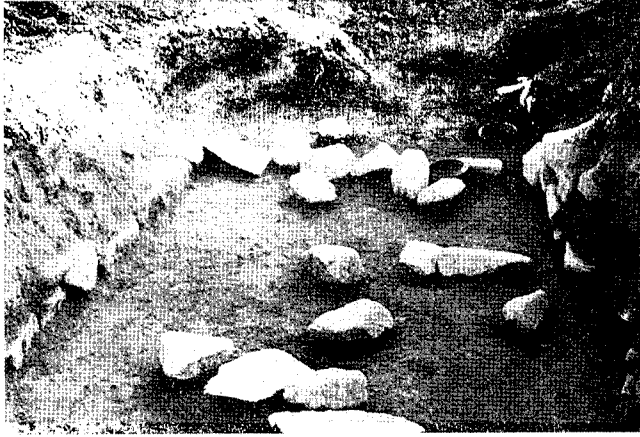
土壙墓(Ⅸの2号)の遺物と出土状況

Ⅸ
の
2
号



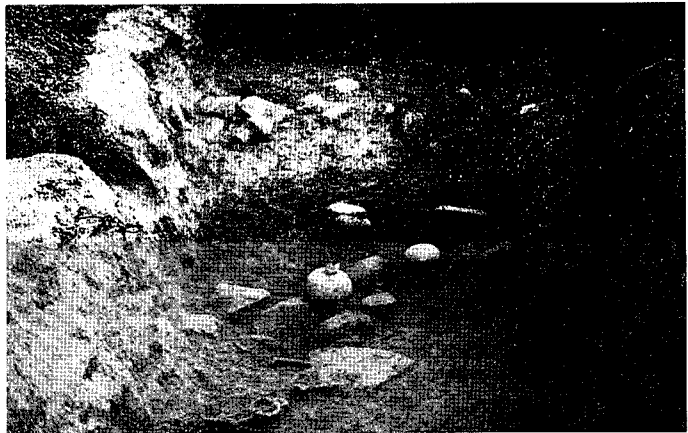
後円部の峯続きの尾根に散在する壙廩古墳X号(上) V号(下)

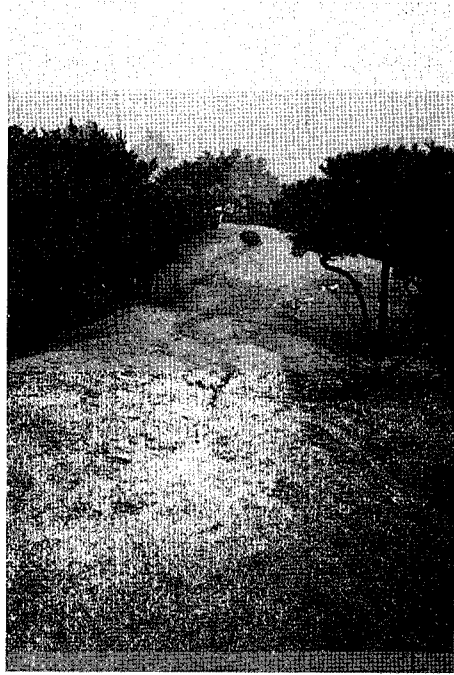




後円部南端峯続き中にて石廓を失い墜
 廢せる横穴式古墳（X号）の清掃状況

| | | |
|----|------|----|
| 遺物 | 金環 | 1 |
| | 銅環 | 2 |
| | 直刀片 | 1 |
| | 鉄斧 | 2 |
| | 鉄鎌 | 1 |
| | 管玉 | 10 |
| | ガラス玉 | 10 |
| | 土玉 | 30 |
| | 長頸壺 | 2 |
| | 埴 | 1 |
| | 坏 | 3 |
| | 蓋坏 | 2 |
| | 馬具 | 1 |

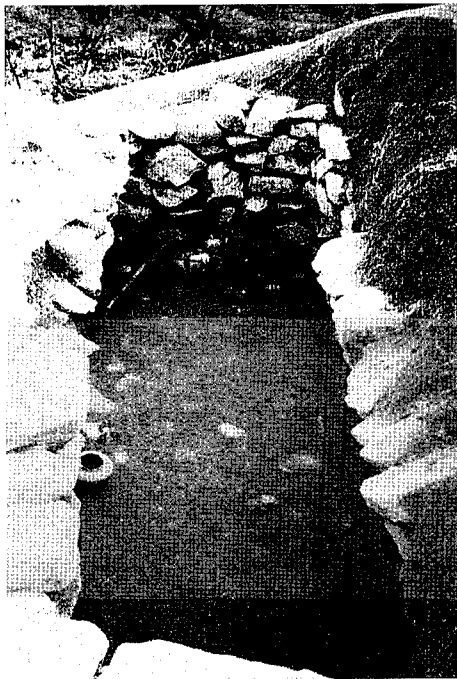




前方部東北尾根つつきに残存の壙横穴式古墳(Ⅶ号)の清掃



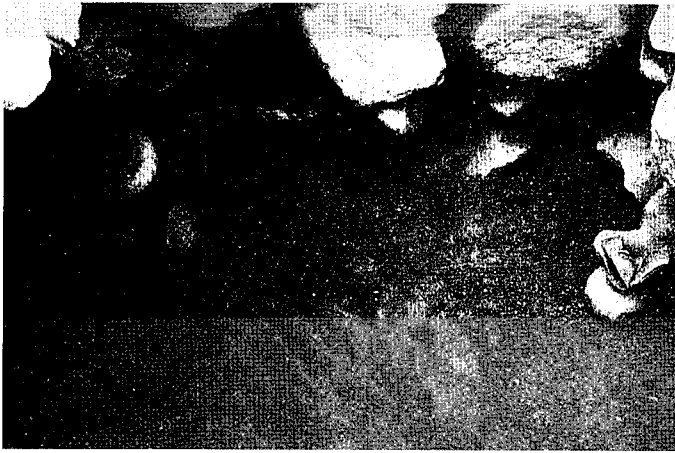
天井石欠如のままのⅣ号の
横穴式石室を羨道方向より見る



| | | | |
|------|-----|----|--------------|
| 出土遺物 | 広口壺 | 3 | |
| | 埴 | 4 | |
| | 提瓶 | 1 | |
| | はそう | 1 | |
| | 蓋 | 1 | |
| | 鉄剣 | 1 | |
| | 刀子 | 2 | |
| | 鉄鏃 | | 平根 4 尖根多数 |
| | 鉄鋤 | 1 | |
| | 鉄鎌 | 2 | |
| | 馬具 | 1 | |
| | 管玉 | 8 | |
| | 小玉 | 多数 | |



(VII号) 石室を奥壁方向よりみる



玄門近くの須恵壺とはそう (右) ↑

管玉丸玉類出土状況



正 誤 表

| | | |
|---------|-------------|--------|
| 表紙 | 古墳発掘 | 古墳発掘 |
| 序 | 前方墳 | 前方部 |
| 一頁見出し | 古墳 | 古墳 |
| 上段 二行 | 後円墳 | 後円墳 |
| 三 | 古墳 | 古墳 |
| 二一 | 本拠では | 本拠は |
| 二四 | 慰の | 慰め |
| 二七 | 葺石 | 葺石 |
| 中段 二 | 未完了 | 未完了 |
| 六 | 真鉛 | 真鍋 |
| 九 | 付の円筒 | 付近の円筒 |
| 一〇 | ハニワ片 | ハニワ片と |
| 下段 六 | 除去作業 | 除去作業 |
| 二〇 | 壊度 | 壊廃 |
| 三一 | 葺石席 | 葺石層 |
| 二頁上段 一 | 管玉 | 管玉 |
| 三 | 提瓶 | 提瓶・はそう |
| 五 | 実例 | 実測 |
| 六 | 亀十 | 十亀 |
| 九 | 積査 | 精査 |
| 一 | 平縁 | 平縁 |
| 一八 | 径一七糖径一・七種 | |
| 中段 三 | 後原形状 | 復原形状 |
| 三頁 一八 | 壊度 | 壊廃 |
| 六頁上段 一六 | 縮尺二〇〇分の一を除去 | |
| 二六 | 粘土被露 | 粘土被覆 |
| 二七 | 容 | 恕 |
| 二八 | 駒井私愛 | 駒井和愛 |
| 中段五行目 六 | 榎原先生 | 梅原先生 |
| 七頁 凸版 | 柚山史 | 柚山守史 |
| 八頁 | 秋山年章 | 秋山輝夫 |
| 九頁 | 国代秀 | 国代利彦 |
| 一〇頁 | 尺度一〇〇分の一を省く | |
| 一三頁 図版 | 尺度一〇分の一を削る | |
| 一五頁 凸版 | 三角線 | 三角縁 |
| | XI | IX |

昭和四十二年三月三十一日発行

【相の谷古墳発掘調査報告書】

発行・愛媛県教育委員会
印刷・クボタ印刷株式会社

松山市竹原町六二八番地ノ一